

文教大学

パブリシティ・オブ・ザ・イヤー大賞2010

【審査結果】

大賞：トピック：“旧モーガン邸を3DCGで復元”

受賞対象：情報学部広内研究室（学生〔当時〕4名：姉崎千尋、有賀里実、土原沙織、中村綾乃、指導教員：広内哲夫）

内容：火災で焼失した旧モーガン邸（藤沢市）をコンピュータ・グラフィックス技術を使用し、3DCG画像として復元し、特定非営利活動法人「旧モーガン邸を守る会」に寄贈した。寄贈された作品は、横浜市の「はまぎんこども宇宙科学館」で常設展示された。本ニュースは、2010年2月から3月にかけて、神奈川新聞をはじめ、6紙に取り上げられた。

受賞理由：4人の学生が卒業研究として取り組んだ取組みは、歴史的建造物の復元という点で大きな社会性・ニュース性を有しており、このことはメディアの掲載件数を見ても明らかである。文教大学の学生による研究活動が、実社会に貢献できることを示したことで、学生をはじめ、本学関係者の誇りを高めたことが評価された。

掲載記事：○神奈川新聞 地域欄 2010年2月28日、○読売新聞 暮らし教育欄 2010年3月2日、○タウンニュース 2010年3月5日、○東京新聞 神奈川版 2010年3月3日、○産経新聞 神奈川版 2010年3月4日、○毎日新聞 神奈川版 2010年3月5日

審査員特別賞

トピック：“スマイルアフリカプロジェクト活動”

受賞対象：文教大学附属小学校

内容：まだ使えるのに履かなくなったシューズを集めてアフリカの子どもたちに贈る「スマイルプロジェクト」に、附属小学校が取組み、その様子が2010年10月6日の日刊スポーツに掲載された。

受賞理由：対象期間からは若干外れるが、本学園の建学の精神「人間愛」を具現化し、エコに取り組む学園としての姿勢をアピールできた活動内容であり、第1回目の審査員特別賞にふさわしいと判断した。

トピック：“全日本アンサンブルコンテストで文教大学が金賞受賞”

受賞対象：文教大学越谷校舎吹奏楽部

内容：2010年3月20日に新潟市民芸術文化会館で開催された第33回全日本アンサンブルコンテストに出場した本学吹奏楽部が金賞を受賞した。この様子が写真つきで3月21日付朝日新聞に掲載された。

受賞理由：文教大学の越谷校舎吹奏楽部の活躍のニュースは、学生をはじめ、卒業生を含めた本学関係者の誇りを高めている。

文教大学

パブリシティ・オブ・ザ・イヤー大賞2010

【審査講評】

パブリシティ・オブ・ザ・イヤー大賞2010に推薦いただいたニュース8件を含む全35件のニュースから大賞および審査員特別賞を選考した。

パブリシティ・オブ・ザ・イヤー大賞は、35件の中から、3つの評価基準（ブランドを高めたか、社会的影響度、本学にふさわしいか）を踏まえ、総合的に点数評価し、第1次投票で得点の高い順から9件が選出された。この9件のうち、上位4件について、内容について精査した上で、第2次投票を行い、5人全員の全会一致で大賞を決定した。この上位4件のうち3件は、大賞を受賞したニュースも含み、学生の活動に焦点をあてたものだった。残り1件は、教職員の活動で、神奈川県教育委員会と協働して、小中高校生のいじめの温床になっているインターネット上の「学校裏サイト」の実態調査に乗り出す情報学部の池辺正典専任講師の取り組みである。裏サイト問題解決に向けた行政と大学の連携として初めての取り組みであり、全国的にも注目を集めた点で特筆に値する。本学園の教職員も社会的に意義のある取り組みをしており、メディアからも注目を集めていることを申し添えておきたい。

審査員特別賞は、ニュースの内容から本学園のニュースとして特にふさわしいもの等について審査員の発議により、2件が選ばれた。

今回の審査全般を通して、本学の教職員・学生・児童生徒が、予想以上に地域とのつながりを積極的にもっていることがメディアに掲載されたニュースで判明した点が大きな収穫である。例えば、越谷校舎の学生団体が地域と連携して行った「文教ファミリーフェスタ」や、教育学部の教員が越谷地区の小・中学校のデジタル教材づくりに協力するニュース、神奈川県と協働し観光に関する講座を移動大学として開く国際学部などである。地域とともにどのように学園が歩むかというテーマは、特にこれからの時代の大きなテーマであることを考慮すると、大変意義深い取り組みだ。

推薦メールをいただいたもののなかでは、『教職課程』に寄稿された教育学部の卒業生の記事が、学生の励みになるという意見もあり、「文教大学卒業」という表記がメディアに出ることがプライドを高める上で効果があることを改めて感じた。

さらに、毎日新聞の夕刊に「キャンパル」という大学生による連載紙面があるが、そこに本学の学生が学生記者として継続して参加し、良い文章を書いている点もここで紹介しておきたい。

最後に、推薦メールをお送りいただいた教職員・学生の皆さんには、第1回目となるパブリシティ・オブ・ザ・イヤーの趣旨をご理解いただき、ニュースをご推薦いただいたことに感謝したい。そして、受賞にはいたらなかったが、ユニークかつ精力的な活動を行っている方々に敬意を表したい。

2010年11月17日

パブリシティ・オブ・ザ・イヤー大賞2010

審査委員長 野島正也